様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｈ００６２７

研究課題名（和文）舞踊の「芸術化」までの実証的検証：日仏伝統舞踊の性風俗からの分離

研究課題名（英文）Transition of Dance Toward 'Pure Art' : Detaching traditional dance from sexual mores in Japan and France

研究代表者
安田　靜（YASUDA, Shizuka）

日本大学・経済学部・教授

研究者番号：９０３３９２２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,200,000円

研究成果の概要（和文）：　フランスのバレエ及び日本における日本舞踊は長い伝統を持ち、今日では「芸術」として誰もが認め得る地位を占めている。しかしそうした「芸術化」が成立し、性風俗から分離したのは実はどちらも20世紀に入ってからであった、という事実は見逃されがちであり、その経緯についての学術的研究は極めて手薄である。
　そこで本研究ではパリ・オペラ座のバレエ団（安田靜）と日本舞踊（武藤大祐）を研究対象として、そうした「脱エロス化」や「芸術化」がいつ頃から、誰によって、どのようにして成し遂げられていったのか、その過程を実証的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　舞踊芸術の歴史を語る際、性風俗と不可分のパトロネージに関する文献が重視されることは少ない。なぜならそうした資料は「踊り子とパトロンの関係」について、いわば「暗黒の歴史」を詳らかにするからである。
　しかし本研究はそうした資料の調査もタブー視せず、舞踊文化の一部として捉え直して、これまで近代的な「芸術」の制度の陰に追いやられ、見逃されてきた観客と舞踊手の関係を実証的視点から明らかにした。特に、バレエと日本舞踊それぞれにおいて、「芸術化」や「脱エロス化」への契機がどのようなものであり、いかにして性風俗との分離が成し遂げられたのかを明らかにした意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：Ballet in France and Japanese dance in Japan have a long tradition and today occupy a position that is universally recognised as 'pure art'. However, it is often overlooked that it was not until the 20th century that such 'artification' was established and separated from sexual mores in both cases, and academic research on how this happened is extremely scarce. Therefore, this study empirically clarified when, by whom, and how such 'de-eroticisation' and/or 'artification' were achieved, using the ballet company of the Paris Opera (Shizuka YASUDA) and Japanese dance (Daisuke MUTO) as research subjects.

研究分野：表象文化論：西洋舞踊史・舞踊学

キーワード：舞踊　バレエ　日本舞踊　芸術化　性風俗　花街　新舞踊運動　定期予約者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

バレエについては、ルイ 14 世による 1661 年のダンスのアカデミー成立以後、常にハイアートとして発展してきた古典舞踊であり、誰もが「芸術」としての価値を認めている。実際、今日のトップダンサーや著名な振付家には国家から勲章を授かる「芸術家」も少なくない。しかし、踊り手がこれほど高い社会的地位や名誉を享受するようになったのは第二次大戦後である。では、それ以前のバレエの社会的地位はどのようなものであったのか。

実は、パリ・オペラ座においてすら性風俗、端的に言えば売春とバレエとは切り離すことが難しい時代が何百年にもわたって続いていたのである。しかしそのような「暗黒の歴史」に関する積極的な研究は極めて少なく、19 世紀以降の特権的アボネ（＝年間を通して桟敷や座席を確保する定期予約者）については *Le Ballet de l'Opéra : Trois siècles de suprématie depuis Louis XIV* (2013) の中でも Martine Kahane 担当の章などにごく部分的に取り上げられているのみで、十分な分析が行われているとは言い難い状況である。

バレエ同様に長い伝統を有する日本舞踊についても、花街との関わりについては近代の舞踊史研究からは取り残されたままの課題である。明治期、歌舞伎役者の舞踊よりも花街の舞踊に期待をかけた坪内逍遥の言説は、花街の内部に一種の分裂を引き起こしつつ、専門的な職能として自律した「舞踊家」の出現を促した。今日の所謂「日本舞踊」の基盤がこうして作られたが、「舞踊家」なる新しいカテゴリーが花街からどのように括り出されて来たのか、その実態は断片的なエピソードから垣間見られるのみであり、西形節子の大著『近代日本舞踊史』(2006 年)でも今後の課題として指摘されている。

以上が本研究の学術的背景であった。

２．研究の目的

本研究における目的の一つは、近代的な「芸術」の制度の陰に追いやられ、見逃されてきた観客と舞踊手の関係を実証的視点から明らかにすることである。さらに、そうした関係が舞踊のあり方にどのような影響を及ぼしていたのか、すなわち観客と踊り手との関係が変わることによってどのような変化が生じたのかについて分析を進めながら、バレエと日本舞踊それぞれにおいて、「芸術化」や「脱エロス化」への契機がどのようなものであったのかについても考察を行う。

また、テオフィル・ゴーチエやステファーヌ・マラルメ、あるいは永井荷風や小寺融吉といった文豪ないし評論家のテクストについては、すでに先行研究が多数存在しているものの、パトロネージに関する無名の著者によるエッセイや当時の手記は、「舞踊芸術」の歴史を語る際に重視されることは少ない。なぜならば、そうした資料は必然的に「踊り子とパトロンの関係」を詳らかにするからであるが、こうした資料の調査をタブー視することなく、むしろ歴史的な舞踊文化の一部として捉え直すことも、本研究の重要な目的である。

研究者はもちろん、舞踊に携わる当事者においても、得てして「暗黒の歴史」と見なされがちな性風俗とのかかわりについて、観客論や劇場のマネージメントという視点からも新たな分析と考察を加えて明らかにし、「芸術化」への過程を明らかにすることが本研究の目的である。

３．研究の方法

これまで本研究代表者（安田靜）と研究分担者（武藤大祐）は近代舞踊文化の「習慣」と「伝統」について考察を進めており、その研究成果の一部は、安田「パリ・オペラ座のダンサーとその観客: 19 世紀の特権的アボネの『踊り子』から 20 世紀の『芸術家』へ」(『研究紀要』: 2010)や、武藤「西洋と非西洋の近代における舞踊の『芸術』化――オリエンタル・ダンス、バラタナティヤム、新舞踊」(舞踊学会口頭発表:2017)で公表している。

しかし、本研究ではこれまで他の研究者があまり取り扱って来なかった様々な一次資料を現物調査し、それらに依拠してさらに詳細な実証研究を行った。

安田は、パリ・オペラ座付属図書館に所蔵されているオペラ座のアボネ（定期予約者）の契約に関するオリジナル手稿資料や、20 世紀前半に同オペラ座で様々な改革を行ったジャック・ルーシェ支配人の行政資料など、当面デジタル化やネット上での公開予定がない貴重な現物資料を現地で閲覧し、連携研究者の森脇優紀の助力を得て翻刻・解読作業を共同で行いつつ、実証研究を行った。

武藤は京都と東京を中心に花街での芸能に関する文献資料を調査・収集しつつ、大正期の新舞踊運動をめぐる報道や言説についても新聞・雑誌資料をもとに調査した。またルース・セント・デニスのアジア巡演については、UCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）の所蔵資料（主に手稿・手紙・写真など）、ニューヨーク公共図書館やジェイコブズ・ピロー・アーカイヴなどの所蔵資料（主に定期刊行物、映像など）を併せて現地調査し、大正期の舞踊界と花街との関係の一端を明らかにした。

４．研究成果

安田は、パリ・オペラ座のバレエ団において、踊り手がいかにして「踊り子」から「芸術家」へとシフトし、脱エロス化を実現したのかを実証的に検証した。さらに、パリ・オペラ座のバレエ団を研究対象として、これまでの一般的な通史ではアボネといえば男性観客ばかりであったかのように叙述されてきたのに対し、実際には相当数の女性客が年間予約を行っていたことを明らかにした。

（１）パリ・オペラ座のジャック・ルーシェ支配人がバレエ・マスターのセルジュ・リファールとともに、「バレエ」の社会的評価・地位向上に向けて、様々な改革を行ったことは広く知られている。しかしながら、それらの方策がいつ、どのような形で実現されるに至ったのかについて、具体的な資料が提示されたケースはほとんどなかった。

そこで、20 世紀半ばにようやく実現した定期予約者の特権廃止に到るまでの経緯を明らかにするため、ルーシェに関する行政資料を網羅的に収集した *Fonds Rouché* の分析に着手し、オペラ座の風紀を乱す定期予約者を舞台裏から締め出すための措置を示す重要な資料（当時の支配人がアボネに宛てたタイプ打ちの手紙）を発掘した。

（２）パリ・オペラ座付属図書館所蔵資料には、当面デジタルアーカイヴ化の予定のない現物資料が多数存在する。オペラ座の観客層に関する資料もそのうちの一つで、主に 1930 年代の手書きアボネリストやその領収書(氏名、住所、座席または桟敷番号、期間、値段が記載)の現物調査を通じて、これまで研究書で描写されてきた「男性ばかりのオペラ座の観客層」とは異なり、実際には多くの女性客がシーズンを通して定期予約者として、多額の契約

を結んでいることを明らかにした。

武藤は、もとは歌舞伎や芸者の座敷芸であった舞踊が、西洋の「芸術」あるいは「舞踊家」といった概念の影響のもとに「日本舞踊」として成立していった過程を分析した。
（３）近年の美学や芸術社会学で提起されている「芸術化（artification）」、すなわち従来は「芸術」とは見なされていなかった文化が「芸術」として扱われるようになる現象についての理論を参照しながら、「日本舞踊」を捉え直した。「日本舞踊」という概念は、大正期の「新舞踊運動」をきっかけとして確立されたものである。これまで、新舞踊運動の舞台の内容がいかに新しいものであったかは論じられてきたが、そうした新しい試みが西洋の「芸術」あるいは「舞踊家」といった概念を受容しながら、社会的制度や価値観の変容といった複合的な過程を通して可能になった点について、初めて指摘した。
（４）上記（３）と関連して、武藤は大正期に来日公演を行ったアメリカのデニショーン舞踊団と日本の舞踊関係者たちとの接触においてどのようなことが起きたのかを調査し、分析した。デニショーン舞踊団はアジア地域の多様な舞踊を取り入れた演目で当時広く知られ、日本から東南アジアを通ってインドまでを巡演しながら各地で交流を育んだ。アジアの舞踊に対する彼らの時代錯誤的なオリエンタリズムが、伝統舞踊の芸術化（高尚化）を志す日本のモダニストたちのそれと奇妙に合致し、「近代化＝西洋化」の象徴として受容された事実を、全く逆の結果を生んだインド（伝統舞踊は過去の遺物として捨て去られつつあった）との対比により明らかにした。

なお、本研究の対象は日本及びフランスに限定されていたが、実際には同様の「芸術化」が欧州の各国でも同時期に進行していたと想定可能であることから、研究対象国を拡大した新研究課題を構想するに至った。この新課題は、安田を研究代表者として「上演文化に関する『芸術化』の国際比較研究：商品及び労働者としての演者を巡る諸問題」[基盤研究(B)23H00594:2023-25 年度]として、採択された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 武藤大祐	４．巻 44
２．論文標題 芸術化された舞踊としての「日本舞踊」――新舞踊運動をめぐる考察	５．発行年 2023年
３．雑誌名 群馬県立女子大学紀要	６．最初と最後の頁 63～73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 武藤大祐	４．巻 42
２．論文標題 デニショーン舞踊団来日公演における石本男爵の公演評	５．発行年 2021年
３．雑誌名 群馬県立女子大学紀要	６．最初と最後の頁 133～144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 武藤大祐	４．巻 43
２．論文標題 デニショーン舞踊団のアジア巡演におけるヴァナキュラーな舞踊文化との接触 ――インドの「ノーチ」と日本の「芸者」をめぐって	５．発行年 2021年
３．雑誌名 舞踊學	６．最初と最後の頁 26～37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　6件）

１．発表者名 Shizuka YASUDA
２．発表標題 Nude or Naked: Body Representation on Stage in Contemporary Dance in Japan
３．学会等名 The 10th International Conference on Social Science and Humanity（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Shizuka YASUDA
２．発表標題 Serge Lifar: His excellent reform in Paris Opera and his sexuality
３．学会等名 International conference on Social Sciences, Humanities and Arts（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 武藤大祐
２．発表標題 日本における伝統舞踊の近代化と芸術化（artification）
３．学会等名 舞踊学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Shizuka YASUDA
２．発表標題 How the Paris Opera was transformed from “the most wonderful seraglio” into a sanctuary of pure art: Jacques Rouche’s key steps to remove male subscribers from backstage
３．学会等名 The 9th International Conference on Social Science and Humanity（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Shizuka YASUDA
２．発表標題 Until when did the Paris Opera remain “the most wonderful seraglio”? -- Transition in the audience’s gender composition in the late 1930s
３．学会等名 Interdisciplinary practices in Management and Social Science（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Shizuka YASUDA
２．発表標題 Dr. Veron at the Paris Opera (1831-1835): Prominent Director or Leader of Decadence?
３．学会等名 ASMSS(Annual Symposium on Management and Social Science)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 武藤大祐
２．発表標題 ルース・セント・デニスの日本巡演における「芸者」との接触――アジア各地のヴァナキュラー舞踊文化との比較において
３．学会等名 舞踊学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shizuka YASUDA, Yuki MORIWAKI
２．発表標題 Opera de Paris and its Abonnes: The Transition of Privileged Theater-Goers and "their" ballerinas
３．学会等名 ICBASS（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 武藤大祐
２．発表標題 ヴァナキュラーな舞踊のリフレーミング――ショーネッド・ヒューズと柿内沢鹿踊の協働
３．学会等名 舞踊学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	武藤　大祐 (MUTO Daisuke) (30513006)	群馬県立女子大学・文学部・准教授 (22302)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	森脇　優紀 (MORIWAKI Yuki) (90733460)	東京大学・大学院経済学研究科(経済学部)・特任助教 (12601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関